

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 陳 晨

論 文 題 目

現代女性作家とメディア表象をめぐる日中間横断研究  
—トランスナショナル・フェミニズムの視座から—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学准教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学教授	中村 靖子
委員	静岡大学教授	桑島 道夫
委員	国際日本文化研究センター教授	坪井 秀人

# 論文審査の結果の要旨

## 〔本論文の概要〕

本研究は、日本と中国の現代女性作家作品とメディア文化を対象として、第三波フェミニズム世代の女性文化の特質をトランスナショナル・フェミニズムという視座から地域横断的に考察し、世代間の差異および「分断」と、日中間の若年層を主体とする文化の「共有」について論じたものである。

第Ⅰ部では、メディア文化やポピュラー文化を対象としている。第1章では、2000年代における「女子」現象に注目し、第2章では、現代中国のネット文化として生産されたオタクや腐女子にあたる鍵語を分析し、日本と中国それぞれの若年層の文化実践の特徴と問題点を、世代とジェンダーによる差異を抽出しつつ明らかにした。

第Ⅱ部では、日本と中国において、権威的な文学賞の受賞者の若年化また女性作家の活躍が同時進行し、また越境的に響き合いながらトランスナショナルな展開を見せていることを指摘した。第3章では日本における若手女性作家の登場と「女子」の語りの様相について論じ、第4章では中国現代文学における「80後(バーリンホウ)」と呼ばれる1980年代生まれの若手作家の活躍に注目し、「美女作家」という表象に対する女性作家の姿勢の変化を指摘した。第5章では日本の現代女性作家の中国における受容状況を分析し、中国における「日本80後女性作家」シリーズの翻訳について考察した。

第Ⅲ部では、日本の「女子」世代と中国の「80後」世代の女性作家の文学作品を取り上げ、具体的な比較分析を行った。第6章では金原ひとみの『蛇にピアス』と春樹の『北京ドール』を取り上げ、性の叙述を通して女性作家による身体的経験の語りの変容を明らかにした。第7章では、現在の「少女」表象を、綿矢りさの『ひらいて』と張悦然の『黒猫は眠らない』を比較して論じ、フェミニズムやジェンダー批評的なスタイルとの距離について論じた。第8章では、金原ひとみの『マザーズ』を取り上げ、女性作家の自己表象のジェンダー制度に対する今日的な批評力を検証している。

第Ⅳ部では、ジェンダーとナショナリティとの関わりを「外国人・女性」を当事者の視点から書くことを選択した女性日本語作家の作品を取り上げて論じている。第9章では楊逸『ワンちゃん』を取り上げ、アイデンティティの複数性と共感を「拒否」することの倫理について考察し、第10章では温又柔『好去好来歌』『母のくに』を取り上げナショナリティに関わる亀裂が「女性」というカテゴリーをめぐって表出されるという重層性を分析した。

## 論文審査の結果の要旨

### 〔本論文の評価〕

本研究の意義は、第一に、日本と中国の、2000年以降の現代に焦点を絞った比較文化・文学研究である点に認められる。近年の文化・文学研究では、一国主義を排して東アジアという視座から国家間のポリティクスや影響関係についての検討が様々に進められているが、本研究が分析対象とした日本と中国の現代文化に関わる比較研究は、決して多いとはいえない。ことに文学研究においては、ほとんどないと言って過言では無い状況であり、本研究には、萌芽的研究としての意義を認めることができる。ことに、経済的なグローバル化とインターネットによる情報のグローバル化が進んだ現代において、国境を越えて展開する文化事象を地域横断的に分析し、その同時代性を具体的に抽出した点は評価できる。第2章におけるポピュラー文化の分析や、第5章における日本の若手女性作家が中国において「日本 80 後女性作家」として受容されている状況の分析は、この点で審査委員の高い評価を得た。

第二には、女性文化・文学研究として、現代の若い女性表現者たちのジェンダー理解の変容を明らかにし、東アジアにおける新しい世代の大きな波の発生を描き出した点が評価された。たとえば、日中の現代女性作家作品を比較分析した第4章、第6章、第7章では、「身体」の物質性や「不機嫌」という情動に注目し、文化や作家の固有性を超えた共振性が認められることが指摘されている。日中それぞれにローカルな文脈がありながらも、直接的な引用や影響関係とは異なる同時代性を浮かび上がらせた点は、日中の現代作品を広く渉猟することによって得られた大きな成果といえる。第1章では、このような同時代性が、社会構造や文化状況において日中の違いが大きかった第二波フェミニズムの段階には認められなかったものであり、第三波フェミニズム世代以降の特質といえることが指摘されている。本研究は、欧米とは異なる東アジアの文化状況の歴史性を明らかにしたものとしても評価された。

問題点としては、同時性がなぜ発生するのかという側面については理論的な説明が不十分であるということ、また同時性を重視したために現代の文化状況における日中の差異に対する分析が薄くなっていること、あるいは先行世代の作品分析が現代の作品分析に比して浅いということなどが、審査委員より指摘された。それらの論点は今後の課題といえるが、決して本論文の成果の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。